

レポーター：学芸員の宮野さんです。よろしくお願いします。

学芸員：よろしくお願いします。

レポーター：こちらの兜はどなたがつくった兜なんですか。

学芸員：黒田長政という人なんですけれども、ご存知ですか。

レポーター：お名前は聞いたことあるんですけど。

学芸員：福岡のですね、江戸時代福岡藩ができるんですけど、その一番最初の殿様だった人ですね。豊臣秀吉の軍師として活躍した黒田官兵衛・黒田如水はこのひとの息子に当たる人です。

レポーター：一番最初ということは、福岡の政治とかを一番最初に作っていった第一人者という。

学芸員：福岡城ですとか、街づくりですとか、支配の仕組みを一通りつくった人ですね。黒田長政さんというのだいたい一の谷形兜といって、こんなですね四角い形の兜で、馬に乗っている姿っていうのが有名なんですけど、あれは関ヶ原の合戦に出陣するときの姿なんですけど、それ以前というのはこの大水牛兜を、まあ通称ですね、ずっと使ってきました。

レポーター：どういった特徴があるんですか。

学芸員：そうですね、桃形兜といって、兜の形がですね桃の実、桃のタネという説もあるんですけど、形をしています。これは南蛮兜といって、ヨーロッパから当時最先端の技術が入ってきて、つくられている兜でして、弾があたってもつるんとよけるようなそんな形のもんです。角が特に特徴的なんですけど、根元の方は木で、あとは和紙をですね、固めて、漆とかでですね、塗って、最後、金箔でピカピカにしているというんで、非常に軽いものになってます。

レポーター：見た目すごく重厚感があるんですけど、木と和紙でつくられているんですね。兜自体の素材というのは。

学芸員：兜は、鉢は鉄でそこに漆をぬって、あと、しころといって首のまわりの守る部分は皮を重ねてそういうつくりになっています。この部分なんかは博多織を使っています。

レポーター：へえ～。

学芸員：地元の素材も使っていますね。

レポーター：実際にこれをかぶって戦場へ行ってたという。

学芸員：そうですね、黒田家重宝故実という本があるんですけど、そこに兜のエピソードが書かれてまして、朝鮮に行ったときにですね、向こう方の敵と川の中で戦って深みにはまってですね姿がみえなくなってしまう。でもこの水牛兜の角だけが水面をこう、ぷかぷか見えていて、殿は無事だという形でですね、戦ったという話があったりしますね。

レポーター：重さはですね、どれくらいあるんですか。

学芸員：重さはですね、兜全体で3,300グラムありますね。

レポーター：かなり重たいですね。

学芸員：そうですね。鎧がまた10キロ以上つきますからですね、そうとう。まあ、殿様は基本的には馬にのって戦っていますけど重かったと思いますね。一応、この兜は江戸時代を通じて歴代の殿様ですね、真似をして、三代藩主と十一代藩主、十二代藩主、この人たちの分が大水牛兜っていうのを使っています。ただ、角の長さはですね、やはり一番初代より大きくてはいけないということで、控えめに細く作っていたり短く作っていたり、そういう工夫がなされています。

レポーター：長政の兜もかなりたくさん慕われていたというか。

学芸員：そうですね、一番最初の殿様とうこともありましたし、非常に思い入れも強かったみたいですね。はい。

レポーター：博物館では常にみられるんですか。

学芸員：この兜は重要文化財になっていますので、常時展示することはないんですけど、展示するときはホームページなんかには告知をしていきたいと思います。

レポーター：そのときは是非見に行きたいと思います。

学芸員：ぜひおいでください。